

係り結びの情報構造表示

The information structure marking function of *Kakari-musubi* constructions in Japanese河野 武¹¹大妻女子大学人間生活文化研究所Takeshi Kohno¹¹Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：日本語，係り結び，係助詞，情報構造，関連性

Key words : Japanese, *Kakari-musubi*, *Kakari* particle, Information structure, Relevance

抄録

日本語は古くから情報構造の図式を意識する言語である。事態を言表する際に、主題マーカーの「は」によって主題と題述を截然と分ける。古典日本語においては、修辭的効果のために構成素を焦点化し、際立たせる手段として係り結び構文がある。係り結びによる焦点化には2種類の形式がある。一つは、「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」が関与し、主題と題述を倒置し、本来の終助詞を係助詞とし、文末の主題節を連体形で閉じる形である。もう一つは「こそ」が関与し、通常語順の特定の構成素を自由に焦点化し、文末は已然形をとり、逆接および順接の等位節を従える形である。従来、これらの係助詞は「は」と並行して何らかの主題を表すとされてきたが、議論の余地がある。そこで、本論では、係り結びの係助詞はむしろ題述（の焦点）を表すものとみなす。また、これと連動して、主題は基底の主題とさらなる主題化によってもたらされた主題との多重主題を生み出すことを述べる。本論では、第二に、係り結びの係助詞の全体像に目を配りつつ、その個別的性質について発話内容、発話構成プロセス、発話態度の観点から明らかにする。また、それぞれの係助詞の関連性モダリティの特性を示す。第三に、係り結びの洗練された修辭があっけなく衰退した要因が、構文の過剰性、コストの高さ、情報構造表示の一般化の達成に帰されることを述べる。以上の係り結びの議論を通して、係助詞という文法カテゴリーは、主題マーカーと焦点（題述）マーカーの下位類からなる情報構造マーカーであることが示されたことになる。

1. 序

係り結びは古典日本語の特徴的な構文であり、「文中に係助詞が使用されたとき、それが文末の結び方（活用語の場合活用形）に影響を及ぼす呼応関係。「ぞ・なむ・や・か」または「こそ」（係り）に呼応して、その文を終止する述語である活用語が、それぞれ連体、已然の各活用形をとる（結び）現象をさす。」（『日本国語大辞典』）。また、係り結びの語用論的・修辭的効果は係助詞が承ける語句を強調することにあると了解されている。次の例を見てみよう。

- (1) 霞立つ春の山べは遠けれど[吹き来る風は花の香ぞする]（古今）
- (2) [その人、かたちより心なむまさりたりける]

(伊勢)

- (3) [これやわが求むる山ならむ]と思ひて（竹取）
- (4) 松浦川川の瀬早みくれなゐの裳の裾濡れて[鮎か釣るらむ]（万葉）
- (5) [きのふこそ早苗とりしか]いつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く（古今 172）

それぞれ、係助詞はそれを含む文内において先行する名詞句や副詞の「香」・「かたちより心」・「これ」・「鮎」・「きのふ」にハイライトを与え、文末の述部の最後に位置する動詞や助動詞を終止形ではなく連体形ないしは已然形で閉じている。

係助詞と終助詞の相通性は広く議論されているが（宮坂(1952)；此島(1966)；阪倉(1993)¹参照）

中でも係助詞「ぞ・なむ・や・か」が終助詞に由来すると見るのは実り多い考えである(大野(1993)参照). すなわち, 例えば(1)の基底形を次の(6a)のようなものとし, それに倒置が伴って(6b)が派生するとみなす考えである.

(6) a. 吹き来る風のするは花の香ぞ

b. 花の香ぞ吹き来る風のするは

(6a)では, 「吹き来る風のするは」は記述の視点を成す「主題」を表し, 「花の香ぞ」は中核的な情報を担う「題述」を表しており, 「ぞ」は終助詞として位置づけられている(Lambrecht (1994); Gundel and Fretheim (2004); Ward and Birner (2004); Erteschik-Shir (2007); 河野(2011)参照). この主題と題述が倒置して(6b)の配列が生ずる. なお, 後置された主題では「は」は随意的となる. このようにして, 伝統的に係助詞と呼んできた「ぞ・なむ・や・か」は, 実は倒置された題述マーカー, すなわち終助詞であったことになる.

「こそ」は上記の係助詞とは性質を異にし, 強意副詞ないしは焦点副詞とみなすべきものであり, 確定的条件を表す文に現れ, 典型的に逆接の後続文を従える. ただし, 後続文は文脈的に含意され顕在化しない場合もある. (5)では, 「早苗を取ったのはつい昨日のことだったのに」と既定事実を振り返りつつ, 季節が移ろって稲葉がそよぎ秋風が吹く今となったことを感慨深く歌っている.

(6b)のような後置された主題はさらなる変容を許容する. その主題を母体として特化した新たな主題が生み出される可能性がある. 新たな主題化の結果は次のようなもの(つまり(1)の形式)である.

(6) c. 吹き来る風は花の香ぞする

「吹き来る風は」は特化した主題, いわば主主題であり, 「する」は基底の主題の残部, いわば副主題となっていることに注意したい. つまりは(6c)は多重主題構文である. 係り結び発話においては多重主題はごく普通に現れる. (2)では「その人(は)」, (4)・(5)では顕在化しない「釣り人は」・「人々は」が主主題になっている.

係り結び現象は万葉, 平安時代に栄えたが, その後室町時代までには衰退したと論証されている(此島(1966); 大野(1993); 阪倉(1993)参照). 「こそ」は別として, 係助詞に代わって主題と題述(の焦点)をできるだけ鮮明に表示するには, 最終的には現代語の次のような形式によるしかない.

(7) a. 吹いて来る風が呈する(帯びる)のは花の

香だ

b. 吹いて来る風は花の香がする

つまりは, 多重主題を断念し, (7a)のように基底の主題のみとするか, (7b)のように文構造を平坦化して主主題のみとするかのいずれかである.(なお, (7a)は(6a)と同一の情報構造である.) 前者では「花の香だ」は構造的に題述であることが示される. 一方, 後者では「花の香が」は「する」との情報価の対比を通して意味的に題述の焦点であることが表示される. こうしてみると, 係り結び現象の衰退には多重主題構造といったやや過重の表示様式が一つの要因になっているものと思われる.

以下, 本論では, 係り結び構文を情報構造の精緻な図式化と捉え, 係り結びの係助詞は主題マーカーである「は」と対極的に題述マーカーとして機能することを論証する. それに沿って個々の係助詞の役割を分析する. また, 係り結び現象の衰退の内的要因を探る.

2. 係り結び構文の情報構造表示の仕組み

係り結び構文は, 主題を背景に据えて題述を際立たせる文形式である. すでに序で概略述べたように, 例えば次の「そ」(「ぞ」の異形)を伴う係り結び構文(8a)は(8b)を基底に設定する.

(8) a. 春の野にすみれ採みにと来し我そ 野を
なつかしみ一夜寝にける (万葉 1424)

b. 野をなつかしみ一夜寝にけるは<主題>
春の野にすみれ採みにと来し我そ<題述>

(8b)では, 主題と題述が構造的に截然と表示されており, 情報の配列順序も規範的である. 事態を中立的に記述する通常の形である. この形に倒置を加え, 題述を主題の前に押し出したのが(8a)である. ここでの主題は名詞節であり, 「は」は明示されてもされなくてもよいが, 名詞節である限り「寝にける」は連体形を取る. 「そ」が連体形の結びを要求しているというより, 主題が名詞節であることの必然性によるものであると言える. この係り結びに強意的発話態度が生じ, 特徴的な修辞効果もたらされる.

主題と題述の重さが釣り合っている(8)のような場合はそれでよいが, 主題が著しく重い場合はどうなるであろうか. 次の例を見てみよう.

(9) a. 秋萩の咲きたる野辺は さを鹿そ 露を

別けつつ妻問ひしける (万葉 2153)

b. 秋萩の咲きたる野辺に露を別けつつ妻問ひしけるは さを鹿そ

c. さを鹿そ 秋萩の咲きたる野辺に露を別けつつ妻問ひしけるは

(9a)の基底形(9b)は明らかに主題が題述よりも目立って重くなっており、その倒置形としての(9c)も重い主題をそのまま継承している。不釣り合いに重い主題を解消するには主題を分割すればよい。具体的には、長い基底の主題を母体として、場所を表す「秋萩の咲きたる野辺に」を特化し、これを主主題とするのである。基底の主題の残部「露を別けつつ妻問ひしける」は副主題として働く。つまりは多重主題構造の設定である。主主題は場面の大きな状況を提示し、副主題は事態のさらに詳細な背景的情報を表出する。こうして情報の中核をなす題述につながられる。このような過程を経て創作されたのが(9a)の歌である。文学作品にふさわしいバランスのよい語句の配置が得られているのが感じ取れる。

以上の主題・題述の表示メカニズムは「そ」・「ぞ」のみならず「なむ」・「や」・「か」にも共通するが、「こそ」は様相を異にする。「こそ」は本来「強意副詞」ないしは「焦点副詞」であり、構成素を自由に焦点化する。具体例をいくつか見ておこう。

(10) よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ 心は君が影となりき (古今 619)

(11) 世の中はかくこそありけれ 吹く風の目に見ぬ人もこひしかりけり

(男と女の仲とはこういうものだったのだ。一目も見えていない人でも恋しくて仕方がない) (古今 475 ; 大野(1993: 135-136))

(12) ありさりて後も逢はむと思へこそ つゆの命も継ぎつつ渡れ

(このまま時がたって、もしかしたら後にお逢いできるかもしれないと思っているからこそ、露のようなはかない命でもつないで生きているのに(あなたはお見えにならなかった)) (万葉 3933 ; 大野(1993: 132))

「こそ」の作用域は、(10)では名詞句「よるべなみ身を」であり、(11)では様態副詞「かく」、(12)では理由を表す副詞節「ありさりて後も逢はむと思へ」と多様になっている。いずれも、通常の文構造を下地にして「こそ」が付加されたものである。「こそ」を含む文は前提として既定条件、すなわ

ちすでに得られている事実を表し、逆接ないしは順接の後続文を従えるのが基本形である。(10)は逆接(「しかしながら〜」)、(12)は順接(「だから〜」)の例である。しかし、既定条件のみしか表出しない(11)のような場合がある。なお、(12)では、さらに文全体が上位の既定条件を形成し、逆接の事態(括弧内で示した内容)を文脈的に暗示している。また、「こそ」は結びに已然形を要求するとみられているが、それは見かけにすぎない。正確を期して言えば、已然形は本来「已に成っていること」、つまりは既定条件を表す活用形であることによるものである。「こそ」は已然形の担う既定条件内の特定の項目を焦点化しているだけなのである(大野(1993: 121)参照)。このようにして、「こそ」の結びの已然形は、「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」の結びの連体形とともに、実は外的要因によるものと結論づけられる。

3. 係り結び構文の強意的発話態度

係り結び構文の修辭的効果は強意的発話態度の表出にある。本節では、その発話態度の語用論的位置づけを解明する。手始めに、このような観点から、すでに見た(8a)・(8b)を(13a)・(13b)として再検討してみたい。

(13) a. 春の野にすみれ採みにと来し我そ 野をなつかしみ一夜寝にける (万葉 1424)

b. 野をなつかしみ一夜寝にけるは 春の野にすみれ採みにと来し我そ

(13a)は原作たる表層形であり、(13b)はその基底形であったが、両者の伝達内容の相違はどこにあるであろうか。まず言えるのは、両者は主題・題述の配列は異なるものの、文意味(命題内容、概念的意味)は等しく「XはYである」のような指定を伝えていることである。両者の違いが浮き彫りになるのは発話意味においてである。(13a)の表出内容を跡づけてみたい。ここでは、春の野にすみれを採みに来たつむりの当初の私と、思いがけず野をなつかしんで一夜そこで寝てしまったその後の私が対比されており、その二つの私の落差に我ながらいささか驚きあきれている(ように見せている)ことが伝えられているのであろう。このような心理状態を表明するこの発話内容が話し手にとって、ひいては聞き手にとってもきわめて情報価値が高いことを強く訴えているのである。情報価値に言及するこのような強意的発話態度は係り

結び構文などの有標構文に固有の特性であって、通常の語順の基底形(13b)には関与しない。

本論の枠組みでは、このような情報価値に敏感な発話態度は、河野(2011)で提案した「関連性モダリティ」に由来するものとみなす。「関連性」は Sperber and Wilson (1986)の関連性理論で規定する概念である。発話は、中身と形の両面から制約を受ける。発話内容は情報価が十分高くなければならず、発話形式はわかりやすくかつ表現効果を上げるものでなければならない。関連性理論では、関連性(の度合い)は「コンテキスト効果」と「処理努力(コスト)」を要因として決定される。コンテキスト効果が高ければ高いほど、また処理努力(コスト)が低ければ低いほど関連性が高くなると規定する。関連性モダリティは「関連性判断」と「関連性意識の判断」の二つのモードをもつ。つまり、発話が関連性をもつ(情報価が高く適切である)か否か、あるいは関連性をもつことを意識しているか否かについての話し手の<主張>や聞き手への<質問>のモードである。関連性モダリティが広範に関与するのはイントネーションであるが、特定の構文や語彙項目にも独特の特性をもつ関連性モダリティがある。今問題としている係り結び構文には、次のように規定される話し手による発話の「最大の関連性の保証」が伴っていると見る。

(14) 最大の関連性の保証

発話 **U** が最大の関連性 **M-R** をもつと私は述べる。

話し手は、この発話 **U** が単に一定の関連性のある情報を伝えることを主張しているのではなく、最大限に関連的な内容を伝えることを保証しているのである。この有標な発話が広いコンテキスト効果をもたらす(わかりやすく言えば強いインパクトを与える)ことの言明である。先の(13a)に即して言えば、この保証に応じて、例えば、相手が自分の印象を変えたり、野やすみれ摘みにまつわるイメージを清新にしたりといった認知状態の大幅な変容をきたすことを期待しているものと思われる。(13b)のようにただ単に自分の特異な体験を語ることに終わってはいない。

(14)の最大の関連性の保証はもともと英語の *it*-分裂文の特徴づけとして提案されたものである。*it*-分裂文は *wh*-分裂文と対比される(河野(2011); Prince (1978)参照)。

(15) a. It is love that I need now.

b. What I need now is love.

it-分裂文(15a)は、*is love* が題述を、*love* は焦点を、さらに *that* 節は主語位置から移動された主題を表している。一方、*wh*-分裂文(15b)は、主語節は主題を、述部は題述 (*love* は焦点)を表している。明らかなのは英語の分裂文と日本語の係り結び構文の並行性である。つまり、*it*-分裂文(15a)は係り結び構文(13a)に対応し、*wh*-分裂文(15b)は係り結び構文の基底形(13b)に対応する。*it*-分裂文は、係り結び構文と同様に、主題を文末に置き、題述(特に焦点)を際立たせる有標の構文である。ここでこそ最大の関連性の保証が効を奏する。話し手の切実な望みの内実を明らかにしているのは(15a)も(15b)も同じであるが、(15a)はこの発話が話し手にとって特筆すべき重要性を持っていることを述べている。さらには、相手がこの情報を得た後に認知内容を大幅に変更することを期待している。例えば、相手は自分が経済的な支援を求めていると思っているらしいことは是正や、相手と自分との望ましい関わり方の見直し、あるいは自分を含めた社会全体の困難な状況への対処などに考えを巡らすことを期待しているかもしれない。聞き手は、相手の意図を推測して適切に対応することが求められる。

ここであえて強調しておきたいのは、最大の関連性の保証は問題の発話全体を対象にするものであり、情報の中核を成す題述(より狭くは焦点)に限定される訳ではないことである。確かに、題述は聞き手にとって何らかの思いがけない新規な情報ではあるが、主題の背景の情報ないしは前提も全くの旧情報とはいききれない場合があるからである。むしろ、主題は実質的に新情報ではあるが、それをより情報価の高い題述を引き立てる梃子として用いることがありうる。先に見た万葉集の歌(13a)もその例である。題述はもちろん歌のクライマックスであるが、導入部の主題も十分ニュース性を含んでいると言える。関連して、大野(1993)は、(13a)について、(13b)との非等価性を周到に次のように述べている。(原文の片仮名は平仮名に修正してある。)

(16) 春の野にすみれを摘みにと来た私(である)が、あまりの野のなつかしさに、一夜そこで寝てしまった(ことだ) (大野(1993: 201))

(16)のパラフレーズで、後半の主題に該当する部分も見過ぎしがたい情報価値をもつことに着目している点は評価できるが、「ぞ」が統御する題述を凌駕しているかのように捉えることは大いに問題である。題述は定義上情報の頂点をなすものであって、その座を主題に譲ることはないと考えべきである。(13a)の主意は、むしろ次のようなものであろう。

(17) あまりの野のなつかしさに、一夜そこで寝てしまったのだが、(そもそもは)春の野にすみれを摘みにと来た他ならぬ私だったのだ

このように、題述の優位性をゆるがせにしないほうが原歌の素直な解釈と言えるのではなからうか。

4. 係助詞の個別的特性

係助詞はそれを含む発話の伝達内容と発話態度の違いによって差異化される。発話行為の観点からは、<主張>を表す「ぞ」・「なむ」、<質問>を表す「か」・「や」、および無限定に<主張>・<質問>を表す「こそ」の三つに分類される。以下、それぞれの個別的特性を明らかにする。

4.1. 「ぞ」

大野(1993)によれば、古典語における係助詞「ぞ」は「未知の情報の教示や報知や断定を中心として、概して上からの姿勢で使われた」(p. 25)という。本論では、視点を変え、「ぞ」の本性は話し手の確信に満ちた伝達内容を強い主張態度を伴って相手に働きかけることにあると見る。非妥協的に、相手の認識の変容を迫るものである。具体例で検証してみたい。

(18) ... 「翁丸」といへど、聞きも入れず。「それ」ともいひ、「あらず」ともくちぐち申せば、「右近ぞ見知りたる。呼べ」とて召せば、まありたり。(枕草子 7)

(19) 上の女房なども、聞きてまゐりあつまりて、[翁丸を]呼ぶにも、今ぞ立ち動く。(同)

(20) 「ものけ給はる。いづくにおはしますぞ。」と、かれたる声のをかしきにて言へば、「ここにぞ臥したる....」と言ふ。(源氏<帚木>)

(21) 「たがふべくもの給はざりしものを、いかがさは申さむ。」と言ふに、... 「いで、お

よすげたる事は言はぬぞよき....」とむつかられて、... (同)

(22) 藤壺と聞こゆ。げに御かたちありさま、あやしきまでぞおぼえ給えり。(源氏<桐壺>)

(18)の状況は、哀れな姿の犬を目の当たりにして、「翁丸」と呼びかけてみるが反応しない。みんな口々に「きっと翁丸だ」、「いやそうじゃない」と言っていて決着がつかない。そんな中「判断できるのは右近よ」と断定が下される。普段から翁丸と間近に接しているのは右近だからである。話し手の確信は揺るぎないものである。またこの断定の発話が問題の解決に極めて重要な役割を果たすことの保証となっている。(19)の前の部分では、ひどい仕打ちにあったことに同情されて、翁丸が身を震わせ涙を流したことが語られている。人の情けを感じて「今度こそは呼びかけに応じて立ち上がって動くのです」と提示される。語り手による場面の叙述であり、それは事実としてそのまま受け入れるほかない。犬の行動の変容が重要な情報価値をもつことが保証されている。(20)では、相手の「どこにいらっしゃるのですか?」という問いに「横になっているのはここよ」と答えている。答えは相手の求めている情報を明示したものであり、それ自体十分関連性をもつが、さらには「ぞ」の表示する「最大の関連性の保証」によって答えの文脈的重要性を裏打ちしている。(21)では、姉が年端もゆかぬ弟に「良いのは大人ぶった物言いをしないことよ」と諫めている。上から目線の言であり、忠告を心して受け止めるように導いている。(22)は、光源氏の母更衣によく似ているという評判の藤壺が登場する場面である。「まさに評判どおり、顔立ちも姿も似ていらっしゃるほどは怪しいまでなものでした」と叙述される。「げに」は事実性に光をあてるものであり、語り手はその効果も計算に入れつつ、読み手に「見よ、この事態を!」と訴えているかのようなのである。事実、光源氏が亡き母の面影を重ねて藤壺を思慕することになる端緒がここにある。

(18)~(22)をもう一度振り返って気づくのは、「ぞ」に伴う話し手の確信や強い姿勢の断定は、現代語の「のだ」や終助詞「よ」と共通するものであることである(河野(2011), (2013)参照)。実際、発話のパラフレーズで(19)・(22)には「のだ」が含まれ、(18)・(20)・(21)には「よ」が含まれて

いた。「ぞ」発話の最終的な目標は相手の認識を変容させることであるから、結局関連性モダリティの視点から＜聞き手に関連的＞な情報内容を伝えるものであると言える。

4.2. 「なむ」

「ぞ」とは対照的に、「なむ」は自分の心の内を明かし相手に認知してもらうことを目標においた標識である。話し手は心の有り様を精一杯記述し、あくまでも聞き手の自発的な協調を期待しつつ発話を提示する。「なむ」の聞き手への働きかけは、「ぞ」の押しつけがましさと対極的に、はるかに穏やかなものである。このような特徴づけと軌を一にして、竹内(1986)は、「なむ」の強調は「専ら、話し手側からの伝達が効果をあげるための強調である。従って、聞き手に対して自分の言葉を浸透させ、納得させる性質のものである」(p. 337)と述べている。さて、「なむ」のきっかけとなる、発話時における話し手の心の有り様は、認知状態と認知行為から成る。認知状態は抱かれている感情・考え・知識を含む。他方、認知行為は認知状態の受容と生成一般に関わり、最も包括的には「思う」があり、下位類には「(感覚や感情を)感ずる」・「気づく」・「(様々な様態で)考える」・「(直接的または間接的に)知る」・「理解する」・「判断する」・「思い出す」などがある。また、連動して、認知とは不可分に認知状態を言表化する「(様々な様態で)言う」が含まれる。ここでの「言う」は発話行為のことであり、発話行為のみならず多様な発話内行為に分派する。以下、具体例を観察してみる。

まずは、認知行為の最も一般的なカテゴリーである「思う」を見てみたい。

- (23) . . . いといたく思ひ嘆きてはかなくなり侍りにしかば、たはぶれにくくなむおぼえ侍りし。(源氏<帚木>)
- (24) . . . 春宮の祖父おとどなど、いかなることにかとおぼし疑ひてなん有りける。(源氏<桐壺>)
- (25) かしこき仰せ事をたびたびうけ給はりながら、身づからはえなむ思ひたまへ立つまじき。(同)
- (26) いかではた、かかりけむと、思ふよりたがへることなんあやしく心とまるわざなる。(源氏<帚木>)

(27) . . . ただこのにくき方ひとつなん心をさめず侍りし。(同)

(23)は無限定の「思う」の場合であり、心ない言葉で相手を死に至らしめてしまったことから、うっかり冗談も言えないという思いが伝えられている。(24)は「疑わしく思う」ことであり、春宮の地位が脅かされるのではないかという疑念が抱かれていたことが述べられている。² (25)は「行為の遂行を思う」(つまりは「決心する」)ことであり、帝からの恐れ多い参内の誘いに決断ができない状態を述べている。(26)は「意識的(持続的)に思う」ことであり、想像していたのとは異なる人の有り様が気になることを表出している。さらには(27)は「不安定に思う」ことであり、問題の女の嫉妬深さだけが心安らかでないことを伝えている。以上の例は様々な様態を伴った「思う」の複合的具現である。そのような思いに捉われていることが特記すべき事態であることが「なむ」によって引き出されている。

次に、様々な情動に浸る、「感ずる」ことを表出する例を挙げる。

- (28) 三位のくらみ送り給ふよし、勅使来てその宣命読むなんかなしき事成りける。(源氏<桐壺>)
- (29) その、人近からむなんうれしかるべき。(源氏<帚木>)
- (30) 中についても、女の宿世はいと浮かびたるなんあはれに侍る。(同)
- (31) 無才の人なまわろならむふるまひなど見えむに、はずかしくなん見え侍りし。(同)
- (32) . . . 又箏の琴を盤渉調に調べていまめかしく掻い弾きたる爪おと、かどなきにはあらねど、まばゆき心地なんし侍りし。(同)
- (28)では、没後間もなく授与されることになった官位の宣命を聞いての家人の悲しみが伝えられている。(29)では、人恋しさの中で人と交わるきっかけができそうな状況への喜ばしさが表されている。(30)では、不安定な男女の関係の中で女の負っている宿世を哀れに感ずることが述べられている。(31)では、無才の自分が相手の女にみっともないふるまいを見られたりしたときの恥ずかしさが語られている。(32)では、外にいる男の笛の音に応じて女が箏を今風に鳴らすのを聞いて、(嫉ましく)聞いてはおれぬという気がしたと述べられている。

次に、「(直接的または間接的に)知る」・「理解

する」が関与する例を見る。

- (33) まだ文章の生に侍りし時、かしこき女のためしを**なん**見給へし。(源氏<帚木>)
- (34) ... 親のおきてにたがへりと思ひ嘆きて、心ゆかぬやうに**なん**聞き給ふる。(同)
- (35) 我はかく人にくまれてもならはぬを、こよひ**なむ**はじめてうしと世を思ひ知りぬれば、はづかしくてながらふまじうこそ思ひなりぬれ。(源氏<空蟬>)

(33)の「見る」は対象を見て(観察して)直接的に知ることを表し、(34)の「聞く」は聞いて(伝聞で)間接的に知ることを表すものである。また、(35)の「思ひ知る」は「理解する」・「悟る」の意である。(33)は賢女についての語り出しの発話であり、(35)も空蟬の巻の冒頭に位置する光源氏の心情の吐露であり、この認知的経験が印象づけるに値するものであることは明らかである。(34)も話題の女性の境遇についての相手の強い関心に応えるための知る限りの情報提供になっている。

今度は、様々な様相で「判断する」ことを具現する例に着目したい。

- (36) 「あはれのことや。此の姉君やまうとの後の親。」**さなん**侍る。(源氏<帚木>)
- (37) これ**なん**え保つまじく頼もしげなき方なりける。(同)
- (38) はかなし、くちをしとかつ見つつも、ただ我心につき、宿世の引く方侍めれば、をのこしも**なん**しさいなきものは侍める。(同)
- (39) ... 極熱の草薬を服して、いと臭きにより**なん**え対面たまはらぬ。(同)
- (40) すべて心に知れらむ事をも知らず顔にもてなし、言はまほしからむ事をも一つ二つのふしは過ぐすべく**なん**あべかりける。(同)

上の例で実際に言表されているのは判断内容であり、判断行為自体は特定の動詞で明示されるわけではないことに注意しておきたい。(36)では、「この子の姉君があなたの後親ではないか」という相手の推測が正しいとする判断を示している。(37)では、思いのほか関係が長く続いた女について、当初はそうは見えなかった事を漏らしている。(38)では、男というものは、相手の女性に不満を抱いたり、満足したり、また出合いを宿世のせいにしてみたりと、どうもたわいのない輩のもののようにだと主観的に結論づけている。(39)では、久しぶりに訪ねてきた男に、(見え透いた口実として) 薬草

の匂いがひどいので不本意ながら対面して頂くわけには行かないと不可能に思える事態を伝えている。(40)では、知識をひけらかすことなく、言いたいことでも一つ二つは言わないでおくのが好ましかったのだと謙虚さに欠ける人物を評している。以上の例は、いずれも話し手の提示する判断が会話の流れの中で聞き流すわけには行かない際立った重要性を帯びていることを実感させるものである。

次に、認知行為から派生して、認知状態を言表化する「(様々な様相で) 言う」場合を見る。

- (41) 年ごろ馴れむつびきこえたまへるを、見たてまつりおく悲しびを**なむ**返す返すの給ひける。(源氏<桐壺>)
- (42) ... 親聞きつけて、盃持て出でて、「我が両つの途歌ふを聴け」と**なん**聞こえごち侍りしかど、をさをさうちとけてもまからず... (源氏<帚木>)
- (43) ... 「一夜の門の事、中納言に語り侍(り)しかば、いみじう感じ申されて、『いかでさるべからんをりに、心のどかに対面して申(し)うけ給はらん』と**なん**申されつる」とて、またことごともし。(枕草子 6)

(41)では、日頃なついている若宮を残して死にゆくことの悲しみを祖母が繰り返して述べていたことが伝えられている。「の給ふ」は語り手の視点からの「言ふ」の尊敬語である。(42)では、白楽天に歌われている二つの道、つまり富家の女は嫁し易いとその夫を軽んずるというのと、貧家の女は嫁しがたいが姑に孝行するのとの二つを踏まえて、その歌を自分が歌うので聞いて欲しいとことさらに言ったことが述べられている。暗に娘を引き立てたいと思つての挙であろう。「聞こゆ」は女の親の視点からの「言ふ」の謙讓語である。(43)では、家の門について清少納言が機知に富んだ応答をしたことを話し手の兄の中納言に話したところ、ひどく感銘して、「いずれゆっくりお会いしてお話したいものだ」と申されましたと伝えられている。「申す」は「言ふ」の謙讓語であり、中納言から清少納言への丁寧さの表示である。「る」は尊敬の助動詞であり、弟から兄に対する対人関係的距離を表している。また、この伝言を伝える発話は、直接話法による他者の発話の引用となっている。上の例のいずれも、発話行為それ自体にも発話内容にも重みがかかけられており、係り結び構文の使用を

裏づけている。

以上検討してきたように、「なむ」は基本的に話し手の心の内、すなわち認知状態と認知行為を明かし相手に認知してもらうことを意図した標識である。さらに進んで、他者の心の有り様の話し手による解釈と記述を提示することもある。話し手は対象とする認知体験を自分自身の多かれ少なかれ主観的な解釈に基づいて、あるいは話し手のレンズを通した理解によって提出する。話し手の認知体験は聞き手に共有してもらわなければ伝える意味がないが、「なむ」は話し手の認知体験を明かすこと、つまりは聞いてもらうことに第一義的な役割があると思われる。本論の枠組みである関連性モダリティの観点からすると、「なむ」は<話し手に関連的>な情報を表示するものとみなせる。「ぞ」が押しつけがましく聞かせて相手の認知状態を変容させることをもって<聞き手に関連的>な情報を表示するのと対比をなすものである。

4.3. 「か」

係助詞の「か」は「や」と共に疑問文(<質問>発話)の終助詞に源泉をもつものであり、平叙文(<主張>発話)の終助詞起源の「ぞ」・「なむ」と対立する。係助詞の派生についてはすでに(9)で述べたが、念のため「か」の表層形と基底形・中間形を示せば次のようになる。

- (44) a. このさまさまのよき限りを取り具し難ずべきくさはひまぜぬ人は いくこにかはあらむ。(源氏<帚木>)
- b. このさまさまのよき限りを取り具し難ずべきくさはひまぜぬ人があらむはいくこにかは。
- c. いくこにかは このさまさまのよき限りを取り具し難ずべきくさはひまぜぬ人があらむ(は)。

(44a)は、(44b)を基底形とし、これに長く複雑な主題と題述とを反転させて(44c)を形成し、さらにはこの後置された主題から新たに「このさまさまのよき限りを取り具し難ずべきくさはひまぜぬ人が」(このような、長所だけを限って身に取り揃え非難すべき種を混ぜない人などが)が主主題として取り出された結果生じたものである。題述「いくこにかは」は疑問の不変化詞「か」の制約によって常に疑問詞が焦点となる。言い換えれば、「か」はどのような位置に現れた疑問詞であれそれを焦

点に据えるが、係り結び構文はそれを明示する役割を負うものである。

「か」は話し手の疑念を表す場合、聞き手への質問を表す場合、話し手の反語を表す場合の三つに分けられる。以下、この順に観察してゆく。

最初に、「か」が話し手の疑念を表す場合を検討してみたい。

- (45) 何ごとかあらむともおぼしたらず、さぶらふ人々の泣きまどひ、上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつり給へるを... (源氏<桐壺>)
- (46) ... といいかめしうそのさほふしたるに、おはしつきたる心地、いかばかりかはありけむ。(同)
- (47) いと深くにくみ給ふべかめれば、身もうく思ひ果てぬ。などかよそにてもなつかしきいらへばかりはし給ふまじき。(源氏<空蟬>)

(45)は、幼い若宮(光源氏)が母(更衣)の死去にもかかわらず何の騒ぎかも分からずに周囲の人々の悲しむ様を不安に思っている場面である。(46)は、更衣の盛大な葬儀が執り行われ、葬送の場に着いたその母の気持ちをおもんばかりにしている状況である。(47)は、空蟬にあからさまに遠ざけられていることを嘆いて、「どうして逢ってはくれないまでも慕わしい応答ぐらひは下さらないのだろうか」と吐露している。これらの疑念の「か」が主題節に(義務的にではないが)推量の助動詞「む」・「けむ」・「まじ」を伴っていることに注意を向けおきたい。疑念はあくまでも内的な想念であり、純粋な質問のように他者(聞き手)の力を借りてそれを解くことを主眼にしているわけではない。疑念は、むしろ自分自身に向けた問いと見ることが出来る。

次に、「か」が聞き手への質問を表す場合を見てみよう。実際に相手の返答を待つ疑問の類である。

- (48) その品々やいかに。いづれを三つの品におきてか分くべき。(源氏<帚木>)
- (49) 君達の上なき御選ひにはまましていかばかりの人かはたぐひ給はん。(同)
- (50) ... 又引きとどめ給ひつつ、「いかでか聞こゆべき...」(同)

(48)は、女の品定め談義の中で座の一人が女は上・中・下の等級に分けられると言い出したことに光源氏が身を乗り出す条である。(49)は、それまでの

談義には男女（夫婦）のあり方で印象深い事例は出てこなかったが、最上の妻選びをしているはずの同席者に具体例を語ってもらいたいものだと光源氏が持ちかけている場面である。語りの新局面への展開を促す言である。(50)は、出会いが一度だけのものにならないように、どうしたら手紙を差し上げることができるかと光源氏が懸命に訴えている状況である。この場での切羽詰まった問いであることがありありしている。

最後に、「か」が話し手の反語を表す場合を取り上げる。反語は次のような質問・応答ペアに基礎をおいている。

(51) Q: I ask you whether it is/is not the case that *p*.

Anticipated/intended A:

A1: [No] I say it is not the case that *p*.

A2: [Yes] I say it is the case that *p*.

つまり、提示された質問において命題 *p* が真であるか否かを尋ねる場合には、期待される／意図された答えは偽の主張 A1 であり、逆に偽であるか否かを尋ねる場合には、答えは真の主張 A2 となる。話し手は意図した主張を伝えるだけであれば単刀直入に A1/A2 を述べればよいが、あえてこの修辞を用いるのは効果を見込んでのことである。自分の疑念に相手を巻き込み、意図した主張（答え）を推測させることで期待感を高めようとする狙いである。反語が修辭的に係り結び構文となじみやすいことはうなずける。

では、続いて、反語と結びついた「か」の実例を確かめてみよう。

(52) はづかしめ給ふめる官位、いとどしく何につけてか人めかん。(源氏<帚木>)

(53) いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひみたらめ。むくつけき事。(同)

(54) 逢ふことの夜をし隔てぬ中ならばひるまも何かまばゆからまし。(同)

(52)は、相手に侮辱されているらしい自分の官位は、この上さらに何を頼みに人並みになれるだろうか、そのような事はあるえないだろうにと述べている。

(53)は、男を手玉にとる賢女のエピソードを聞いた後での反応で、どこにそんな女がいようか、いるはずはないと前提を却下している。(54)は、毎晩逢っている中であれば昼間であっても何が恥ずかしいことがあるのでしょうか、何もないはずだと主張を折り畳んで示している。問いの前段をなす仮

定は反事実であることに注意しておきたい。女性がないがしろにされていることへの仕返しが発話の壺なのである。

総体的に、「か」は、相手への質問を中核にしており、反語は話し手の主張内容に相手を誘導する質問であり、疑念は聞き手が話し手自身である内的質問とみなせる。こうして、本論の枠組みである関連性モダリティの観点からすると、「か」は聞き手に関連的>な情報を表示するものとみなせる。

4.4. 「や」

係助詞「や」は質問・疑念・反語を表し、一見「か」と同様にふるまうように思われるかもしれないが、両者には繊細な違いがある(山田(1908); 松下(1974)³; 大野(1993); 尾上(2002)⁴参照)。大野(1993)は、「か」が「事態や対象に対して話し手は判断を下しかねて」(p. 262)いることを表すのに対して、「や」は「事態がすでに成立していると思込んでいて、その判断を下し、きっとそうだと相手に問いたずら」(p. 272)役割をもつと説明している。基本的な特徴づけには異論はないが、本論ではさらに精緻な分析を試みる。

「や」は、話し手の主張（判断）を提示し、それへの聞き手の<同意>や<確認>を求めることを表示するものである。話し手の主張を聞き手と共有することを意識的に目指す標識である。同意を求めるプロセスは「私は事態をこのように見るのですが、そうではないでしょうか？あなたもそう思われませんか？」といった伝達内容に含まれる。一方、確認の求めは、「私は事態をこのように見るのですが、そうではないのでしょうか？あなたはどのように思われますか？」といった働きかけの一部をなす。興味深いのは、同意も確認も否定疑問文の形をとることである。否定疑問文には相手の答えが肯定的であることの期待が伴っている。肯定疑問文にはそのような期待は含まれない。具体例を見ておこう。

(55) [宮仕えする人は]... 見ぬ人はすくなくこそあらめ... 殿ばらなどは、いとさしもやあらざらん。(枕草子 22)

(56) ... 忠隆聞きて台盤所のかたより、「[翁丸の帰りにたりつることは]まことにや侍らん。かれ見侍らん。(同 7)

(55)では、宮仕えする男女を比較しており、女性は

宮中で見知らない人はほとんどいないだろうが男性はそれほどでないのではないだろうかという筆者の(独断的とは言わないまでもかなり主観的な)見解を提示しているが、そのような見方に読者が同意してくれることを期待しているものと思われる。(57)では、帰還した翁丸のことを話している会話に忠隆が加わって、「翁丸の帰還はどうも本当のようですが、どうなのでしょうかね？」と確認を求めている。この場合は、話し手の判断よりも聞き手の直接体験(既知情報)の方が信憑性が高いからである。同様の同意と確認の例をもう一つずつ挙げておく。

(57) 「琴の音も月もえならぬ宿ながらつれなき人を引きやとめける わろかめり」など言ひて、「いま一声。聞きはやすべき人のある時、手な残り給ひそ」など... (源氏<帚木>)

(58) 「いとかしこき仰せ事に待るなり。姉なる人にのたまひみん。」と申すも、胸つぶれておぼせど、「その姉君は朝臣のおとうとや持たる。」「さも侍らず...」 (同)

(57)では、訪ねてきた男の笛に合わせて女が琴を優美に弾いたことを承けての和歌で、「琴の音も月も特上の宿ですが、あなたはつれない私をしっかり引き止めました。そう思いませんか？」と男が同意を誘っている。(58)は紀伊守と光源氏の会話であり、「姉」は紀伊守の後親の空蟬を指し、光源氏が空蟬の弟を参内させる考えを述べたことに続く部分である。光源氏は、空蟬と紀伊守の父との間に子供(つまり紀伊守の兄弟)がいるのではないかと思うが本当にそうかどうかを確認している。光源氏の関心の的が空蟬の境遇にあることは言うまでもない。

このように、「や」は、基本的に、話し手の主張(判断)への聞き手の同意や確認を求めることを表示するものであるが、問いかけが話し手自身に向けられることがある。そのような再帰的問いかけが「疑念」を形作る。⁵ 具体的に次のようなものである。

(59) ... いみじげにはれ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わななきありけば、「翁丸か。この頃かかる犬やはありく」といふに... (枕草子 7)

(60) 先の世にも御契りや深かりけむ、世になくきよらなる玉のをのこ御子さへ生まれ給ひ

ぬ。 (源氏<桐壺>)

(61) ... 人がらのあはれに情有りし御心を、上の女房なども恋ひしのびあへり。「なくてぞ」とはかかる折にやと見えたり。 (同)

(62) ... みにくきかたちをもこの人に見や疎まれんとわりなく思ひつころひ、疎き人に見えれば面伏せにや思はんと憚りはぢて... (源氏<帚木>)

(59)では、「この頃こんな犬が歩き回っていたかもしれないと思うが、そうではないのだろうか、どうだろうか？」と自分に確認する形を借りて疑念を述べている。疑念の提示は発話場面にいる誰かからの反応を半ば期待しているとも受け取れる。

(60)では、「前世でも夫婦の契りが深かったのだろうかと思うが、そうではないのだろうか、どうだろうか？」と疑念を伝えている。語り手の主張に推量の助動詞の「けむ」が含まれていることを注視しておきたい。(61)では、故更衣を偲んで、『亡くなってから(人は恋しくてあったことよ)』と古歌にあるのはこのような状況を言うのだろうかと思われる」と述べられている。主張は一部「かかる折にやあらむ」のように復元可能であり、ここにも確信度の低いことを表す推量の「む」が伏在している。(62)は係り結び構文が連続して現れるが、最初の発話では「悪い器量にしてもこの人に見て嫌われないだろうか」という疑念が、二番目では「親しくない人に顔を見られるならば夫が不名誉に思うのでは[ないだろうか]」という疑念が表出されている。ここでも、両者とも主張には「む」が伴っている。

次に、「や」が反語を誘発する場合を検討する。反語は、提示した質問に話し手自身が否定的な答えを強く含意し、その答えへの聞き手の同意を誘い出す修辞技法である。次の例を見てみよう。

(63) さてもかばかりの家に、車入らぬ門やはある。 (枕草子 6)

(63)では、「それにしても、これほどの家に、牛車の入らない門なんてあるものではないか」と問いを突きつけている。明らかに話し手は「そのような門はありはしないでしょう」と否定的な内容を暗示的に自ら答え、さらに聞き手に「あなたもそう思いませんか？」と同意を求めている。今質問の中心部のみに注目すると、質問は「車入らぬ門あり」を p とし、「私は p が真か否かをあなたに尋ねる」と定式化される。それへの答えは「私は p

が真ではない（つまり偽である）と述べる」となる。聞き手に期待するのは自分の答えへの同調である。反語は「やは」の形式を取ることが多いが、類例を追加しておく。

(64) ... 「門のことをこそ聞えつれ、障子あげ給へとやは聞こえつる」と言へば ... (枕草子 6)

(65) いづれの御方も、我、人におとらんとおぼしいたるやはある ... (源氏<桐壺>)

(66) 「手ををりてあひ見し事をかぞふればこれひとつやは君がうきふし えうらみじ」など言い侍れば ... (源氏<帚木>)

(64)では、「門の事は申し上げましたが、障子をお開けなさいとは申し上げましたかしら」と問い詰めている。そんな事を言わなかった事は自明であり、その事への同意を促している。(65)では、「どなたであれ、自分が人より美貌が劣っているだろうと思う人などいるのでしょうか」と疑問を投げかけている。誰にも自尊心がある限り、そんな人はまずいないであろうというのが道理にかなった答えである。聞き手は同意を促されるまでもなく自ずからそのような判断に到達するであろう。(66)では、離別の歌に込めて、「逢瀬を指折り数えてみるに、あなたの辛い節目は今一つでしょうか」と問いかけている。事態がそうでないことが双方にとって自明な場合である。一見無駄なやり取りに映るかもしれないが、残念な事態の認識の足並みを揃えることには役立っていると言えるであろう。

さて、係助詞「や」のもう一つの重要な特性を引き出すべく、疑問詞を従える場合に注目してみたい。大野(1993)の観察する次のような例である。

(67) ここにして筑紫や何処白雲のたなびく山の方にしあるらし (万葉 574)

(68) ほととぎす来鳴きとよもす橋の花散る庭を見む人や誰 (同 1968)

「や」が疑問詞と共起する場合は、疑問詞は後続位置にしか現れず、「何処や筑紫」のような連続は排除される。これは「か」とまったく対照的である。大野はこのような「や」は主題を表示する「は」と対応づけられるとしている。両者の違いは、「は」が「問題を提示して答えを求め[る]だけ」(p. 282)なのに対して、「や」は「既に心に思い込んでいるものを全面的に強く指す」(ibid.)ことにあるとされる。また、「は」には他の事物との対比があるが、「や」は言及された事物一つを思い込んでいるこ

とを表すと見る。該当部分の意味は、「一体全体筑紫なんて何処なんだ」、「花の散る庭を見る人は一体誰なんだ（アナタ以外ニナイノニ訪ネテ来ナイデハナイカ）」のようにパラフレーズされる。この種の「や」の特性の核心に迫る前段として、「や」が疑問詞を承けないのはなぜかを考えてみる。

「か」や「ぞ」が「誰か」、「誰ぞ」のように疑問詞を焦点に据えるのに、なぜ「誰や」を排除するのかである。^{6,7} 端的に言って、その答えは質問のモードの違いにある。「か」はストレートに yes-no 疑問・wh 疑問を問うものである。一方、すでに示したように、「や」は話し手の主張への聞き手の同意や確認を求める問いである。したがって、問いの前段に話し手の主張が形成されなければならない。例えば、「汝や待つらむ」は「私はあなたが待っていると思うが、そうではありませんか／そうでしょうか？」のように主張が踏まえられている。しかし、「誰や待つらむ」は変項の値が不定の疑問詞を含むがゆえに命題の真偽は一義的に定まらず、したがって必然的に主張は形成できない。「や」が先行する疑問詞を焦点化しないのはこのためである。では、「や」が後続する疑問詞とは問題なく共起するのはなぜであろうか。そこで、今「か」と対比しつつ「や」の情報構造を見てみたい。

(69) a. 筑紫は何処か。 <主題>+<題述>

b. 何処か筑紫は。 <題述>+<主題>

(70) a. 筑紫は何処 ϕ /*や。 <主題>+<題述>

b. *何処や筑紫は。 <題述>+<主題>

c. 筑紫や何処 ϕ 。 <焦点的主题>+<題述>

(69a)は無標の情報構造であり、「か」は終助詞の性質を保っている。(69b)は(69a)の語順を反転させた係り結び構文である。(70)においては、上述の「や」の共起制限のために(69)の対応形は不可となる。では、(70c)のみが容認されるのはなぜであろうか。本論では、(70c)は「や」がゼロ形の<質問>の終助詞を伴う(70a)を基底にしていると見なす。「何処」はこの終助詞によって質問の焦点として認可されるものと考えられる。(70a)の「筑紫は」は通常の問題を表し、すでに会話に登場した事物を発話の起点にして再度言及する役割をもつだけである。対比的に、(70c)の「筑紫や」は表現性が際立つ主題を表す。この種の主題を<焦点的主题>と呼ぶことにする。焦点的主题は「まさにその/他

ならぬ／とりわけ重要（関連的）な事物」などの主観的態度を包み込んでいる。さらに状況次第では、〈悩ましさ〉・〈興奮〉・〈憧れ〉などの個別的な情動が伴うこともあろう。(68)は焦点の主題の表現性の際立ちの好例である。ここでは、文末の題述「誰」の先行部分がそっくり主題を成しており、長い関係詞節によって「人」が詳細に描写されている。まさにこの状況になくはならないはずの人物は誰であろうあなたでしようかと相手を責めているのである。

「や」の議論を締めくくるに当たって、この係助詞の関連性モダリティを同定しておく。「や」は、話し手の主張（判断）を提示し、それへの聞き手の同意や確認を求めることを表示するものであり、話し手の主張を聞き手と共有することを意識的に目指す標識であった。主張はあえて提示した質問への話し手自身による否定的な答え、つまりは反語の形をとることもあり、また問いが話し手の内部にとどまる疑念の場合もあった。⁸ いずれにせよ、一義的に話し手と聞き手の情報の共有化が図られている。これを関連性モダリティに位置づければ、「や」は〈話し手・聞き手に関連的〉な情報を表示するものとなる。

4.5. 「こそ」

「こそ」は「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」とは異なり、終助詞を起源にもたず、実質は焦点副詞として先行する構成素にハイライトを与える役割を果たす。現代語の例で説明したい。

(71) 君こそすべてだ。

(71)は次のように、意味的に「前提」と「焦点」から成る(Chomsky (1970); Gundel and Fretheim (2004) 参照)。

(72) (私の) すべてなのは君だ。

ここでの前提はつまりは主題節であり、焦点は題述である。「XはYだ」はより詳しく言えば「Xは何かと言え、それはYだ」のようになり、Xの中身をYと同定・指定する形式である。疑問詞疑問文とそれへの答えが内在化されていると見てよい。さらに、「こそ」による焦点化は「Xは何かと言え、それはYそしてYのみだ」のような変項の他の値を排除する条項が伴っていると考える。したがって、(72)をさらに厳密に述べれば、次のようになる。

(72)' (私の) すべてなのは君、君だけだ。

ここで、古典の例に移行したい。

(73) なほ、哀れがられてふるひ鳴き出でたりし
こそ、世に知らずをかしく、哀れなりしか。
人などこそ、人に言はれて泣きなどはすれ。
(枕草子 7)

「こそ」は連続して現れているが、最初の発話では「この上なく感動的だったのは、(犬の) 翁丸が人間に同情されて身を震わせて泣き出したこと、ひとえにそのことだった」と犬のふるまいを焦点化している。後の発話では、「人に同情されて嬉し泣きしたりするのはもっぱら人間なのだが」と人間が特化して提示されている。⁹ ここで特に注意を喚起しておきたいのは、「こそ」は焦点の標識であって、決して主題ではないことである。それを主題（の相当物）と見る従来の説(山田(1908); 松下(1974); 大野(1993); 阪倉(1993); 川端(1994); 半藤(2003)¹⁰など)は受け入れがたい。ここでは大野(1993)の説明に注目し、次の例を検討してみたい。(なお、意味表記は原文の片仮名を平仮名に変更してある。)

(74) か青なる玉藻沖の藻 朝羽ふる風こそ寄せ
め、夕羽ふる浪こそ来寄せ 浪の共か寄り
かく寄る 玉藻なす寄り寝し妹を
(青い美しい藻を朝吹く風こそ寄せるだ
うから、夕浪こそ寄せて来るから、その浪
と共に左右に揺れる玉藻のように寄り合
って寝た妻を) (万葉 131; 大野(1993: 103))

「こそ」が根底に置いているのは、それぞれ「朝羽ふる風が」、「夕羽ふる浪が」であって、「朝羽ふる風は」、「夕羽ふる浪は」ではない。このように、「こそ」の作用域は新情報を表す主格名詞句ではあるが主題ではない。「こそ」は一貫して焦点マーカーなのである。前提（主題）と焦点をもっと明確に表示すれば、「青い美しい藻を寄せるであろうものはまさに朝吹く風であり、寄せて来るのはまさに夕浪だから」となる。大野は、さらに敷衍して、「こそ」は「題目の提示に限らず『いくつもの中から一つを選択して、それを肯定的に強調する』役割を帯び(る)」(p.150)と述べている。次の例を参照。

(75) さまあしき御もてなしゆゑこそすげなうそ
ねみ給ひしか
(みっともない御寵愛が何よりもひどい原因
となって、みんながそねむようになった
けれど) (源氏<桐壺>; 大野(1993: 150))

ここでは、「みっともない御寵愛」は候補となるいくつかの原因の中から一つを選択したものとみなされている。しかしながら、すでに述べたように、「こそ」は「Xは何かと言えば、それはYそしてYのみだ」のような焦点化規定のYを表示するものである。これはXの値はYであってそれ以外ではないことを述べるものであり、候補となる値の選択を真っ向から封ずるものである。事実は大野の特徴づけとは正反対である。(75)の主意は「みんながそねむようになったのは、ひとえにみっともない御寵愛が原因であった」とすべきものである。「こそ」のハイライト効果が如実に感じとれるはずである。

「こそ」は等位接続文を規範形とし、典型的に「Aであるが／にもかかわらずB」のような逆接関係にある最初の接続文に生起する。既定の事態を提示し、その事態から予測しにくい、あるいはありえない事態を言表するのがこの係り結び構文である。先に見た(73)の後の例では「こそ」文と対をなす接続文が省略されているが、「(驚くべきことに)犬が人に同情されて嬉し泣きしたのだった」のように復元可能である。省略されたのは先行発話の内容と余剰的だからである。逆接の類は次の例でも確かめられる。

(76) 「...家の主と定め申すべきことの侍るなり」と言へば、「門のことをこそ聞こへつれ、障子あけ給へとやは聞こえつる」と言へば、「なほそのことも申さん。そこに侍らはんはいかにいかに」と言へば... (枕草子 6)

(77) かたかどにてもいかが思ひのほかにかしからざらむ。すぐれて疵なき方の選ひにこそおよばざらめ、さる方にて捨てがたきものをば。(源氏<帚木>)

(76)は、中宮が大進生昌邸に行啓した折のエピソードであり、主人がうっかり断りなしに障子を開けてしまったことに触れたものである。「確かに(狭すぎる)門のことには苦言を申し上げましたが、障子をお開けなさいなんて申し上げたでしょうか」と清少納言が問いただしている。もちろん「そんなことを申し上げたつもりはありません」と反語的含意を伝えている。自分の言ったことは自覚しているが、言ってもいないことで不都合を被るのは困ると訴えている。逆接で結ばれた二つの事態は対比的ではあるが特に何らかの因果関係があ

るわけではない。(77)では、少しは長所も認められる女性について、「きわだって欠点のない奥方として選ぶのは及第しないにせよ、その程度としては捨てにくい女だから」(柳井他(2017: 93))とコメントしている。そのような女は申し分ないとは言えないまでも結局関係を保ってしまうと言った趣旨を伝えている。このように、「こそ」を直接含む文は話し手と聞き手が共有する、ないしは容易に共有可能とみなせる確固たる前提的知識、例えば一般的真理、社会文化的な前提や共通体験などを表す。(73)では人の習性が、(77)では妻選びの基準が、さらには(76)ではすでに交わされた会話の内容が前提になっている。後続文は、そこを踏み台にして、意外な事態を登場させるのである。「こそ」はこのような逆接を規範とするが、実は前提的知識を引き合いに出すことなく、単独文で注目に価する事態の出現を提示することも多い。この例は(73)の最初の「こそ」発話に見ることができる。ここでの表出内容は自足しており、逆接的な展開を計画したものではない。

「こそ」発話には、他の係り結び構文と共通に、話し手による発話の「最大の関連性の保証」が伴っている。発話が強いインパクトをもつことの裏打ちである。その証左の一つは様々な強意表現にある。次の例を見てみたい。

(78) ...艶にあえかなるすきずきしきのみこそをかくおぼさるらめ。(源氏<帚木>)

(79) 世中や、ただかくこそ。取りどりに比べ苦しかるべき。(同)

(80) はかなき事だにかくこそ侍れ。まして人の心の時にあたりてけしきばめらむ、見る目のなさをば頼むまじく思う給へて侍る。(同)

(81) おとに聞きつる御ありさまを見たてまつりつる、げにこそめでたかりけれ。(同)

(82) おぼえなきさまなるしもこそ契りあるとは思ひ給はめ。(同)

(78)の文意は「あだめいて嫋嫋とした感じの色恋ばかりを魅力的にお思いになることであろうが」(柳井他(2017: 127))であり、「のみ」が焦点項目の排他性を強めている。(79)は、先行の語りを承けて、「男女の仲とはただそのように千差万別なものだ」と「ただ」が強意を添えている。(80)では、事物の外見と内実との落差が主題になっており、「絵

や習字のようなものですら（意外にも）落差が見られるのだから、人間の情愛はましてやだ」と通常深刻な落差が予測されない絵や習字を基準に取り、十分予測される人間の情愛は当然その落差は大きいことを「だに」によって比較しつつ強意化している。(81)は、光源氏の美男ぶりは目の当たりにして実に素晴らしかった、と「げに」は感嘆の度合いを強めている。(82)の主旨は「思いがけない逢瀬はそれこそ前世からの約束があると思って下され」(柳井他(2017: 171))であり、「しも」は「まさにそのこと」の意で焦点を鋭角化している。

「こそ」発話について、話し手による発話の「最大の関連性の保証」を正当化するもう一つの類は、表現効果を狙った様々な修辞技法である。次の例で確かめてみたい。

(83) いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひむたらめ。むくつけき事。
(源氏<帚木>)

(84) 男いたくめでて、簾のもとに歩み来て、「庭の紅葉こそ踏み分けたるあともなけれ」などねたます。(同)

(85) 「姫宮の御前の物は、例のやうにては、にくげにさぶらはん。ちうせい折敷にちうせい高坏などこそよく侍らめ」と申すを...
(枕草子 6)

(86) 数ならぬ身ながらも、おぼし朽たしける御心ばへのほどもいかが浅くは思う給へざらむ。いとかやうなる際は際とこそはべなれ。
(源氏<帚木>)

(87) 「... このさまさまのよき限りを取り具し難ずべきくさはひませぬ人はいづこにかはあらむ。吉上天女を思ひかけむとすれば、ほふけづきくすしからむこそ又わびしかりぬべけれ。」とて、みな笑ひぬ。(同)

(83)ではメタファーが用いられている。正体がつかめぬ女をうす気味悪い「鬼」に喩えている。このおかげで「こそ」発話は感覚的で印象深いものになっている。(84)ではメトニミーが働いている。表面上は庭の風景が述べられているだけであるが、真意は「あなたの下には懸想人がまだ来ていないようですね」といったものであろう。「庭の紅葉」は庭に存在する紅葉であり、庭は屋敷の一部であるという隣接性から、結局「屋敷の住人」を指している。迂回した指示で話し手は「思わせぶり」ないしは「茶化し」を伝えているように思われる。

(85)にはオノマトペないしは音表象が見られる。4歳の可愛い姫宮にふさわしいお膳や台の類は、普通のものではなく、「ちいっちゃい」折敷に「ちいっちゃい」高坏などがいいだろうと述べている。明らかに、「ちいっちゃい」は可愛らしさを音声的に模写したか、幼児語で姫宮の物言いを模倣したかであろう。表現効果は直接的かつリアルである。(86)にはトートロジーが仕掛けられている。光源氏に入内を強く望まれながら、我が身が見下されていると感じている空蟬が「まことにかような身分の女はそれにふさわしい関係がふさわしいのです」(柳井他(2017: 169))と答えている。「際は際なり」は同語反復であり、「そのような関係以上でも以下でもない」と言っていることになる。要するに、日陰の身のままでそっとしておいてほしいと訴えているのである。(87)はジョークである。理想の女性として吉祥天女を思いやったりすると、仏教めいてきて靈妙すぎて抵抗を感じてしまうだろうと戯れている。少々ばかげたことをあえて想定して空想を共に楽しんでいるのである。これらにはすべて文体意識の高揚が伴っている。

「こそ」の議論の締めくくりに、この係助詞の関連性モダリティに言及しておく。この係助詞は他の係助詞とは異なり、語彙的に話し手/聞き手のどちらに関連的かの指定をもたない。単に一般的・中立的に関連的であると了解すればよい。

5. 係り結びの衰退の要因

係り結びの修辞は、奈良・平安時代に絶頂に達し、室町時代までにはほぼ滅んだことが確証されている(宮坂(1952); 此島(1966); 大野(1993); 阪倉(1993)参照)。史的变化をおおざっぱにたどってみれば、「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」については、終助詞から焦点(題述)マーカーとしての係助詞となり、文末の主題節を連体形で閉じる形を原型にした。やがて日本語全体に及んだ活用の変化に伴って、連体形は終止形と拮抗ないしは合流した。その間にこれらの係助詞はスタイルや作者の好みに傾斜しつつも使用が徐々に後退した。(同時に、本来の終助詞としての機能にも変化が生じた。)「こそ」については、実質は焦点副詞として通常の語順の特定の構成素を自由に焦点化し、文末は已然形をとり、逆接および順接の等位節を従える形を原型とした。等位節は文脈的に省略されることも多かったが、次第に等位節を伴わない形が一

般化し、文末の已然形は実質終止を合図しながらも已然形を維持した。その後已然形は終止形に道を譲り、現代日本語まで生き長らえた。結びにおける活用のほころびは見かけほどの重要さはないと判断されるが、一旦確立した係助詞がほぼ消滅したのは日本語にとって大きな質的変化であったと言える。さて、日本語の基本的語順を犠牲にしてまでも成立させたこの贅沢なシステムが著しく衰退したのはなぜであろうか。以下、その要因を推測してみたい。

係り結び衰退の要因としてまず言えるのは、係り結びの過剰性である。題述を主題から際立たせ、「最大の関連性の保証」によって発話を強意化するだけであれば、一つの文形式があれば十分である。それを、日本語は大別して二形式、つまり「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」のように主題を文末に置き連体形を取る形と、「こそ」のように文末は已然形を取るが、通常の語順の特定の構成素を自由に焦点化する形を設けている。それに加えて、個々の係助詞による固有の表示内容が盛り込まれている。英語などのように、同等の機能を持つ形式が it-分裂文だけしかない言語から見て明らかに過剰である。さらに、言語システムが過剰であるばかりか、使用もかなり自在であったと言える。試みに、源氏物語<桐壺>の冒頭の 11 段落(鞍負命婦を更衣の母君のもとに遣わす段まで)を原文と谷崎潤一郎の現代語訳、E. D. Seidensticker の英訳で使用頻度を比較してみよう。

(88) 源氏物語<桐壺>(冒頭 11 段落)における係り結び及び対応形の使用頻度

A) 原文: ぞ 6 なむ 3 や 3 か 3 こそ 3 (計 18 例)

B) 谷崎訳: こそ 4

C) Seidensticker 訳: it-分裂文 5

(なお、訳で原文の何らかの係り結びを反映しているのは、B)で 2 例、C)で 3 例である。) 原文における係り結びの頻度が突出していることが見てとれる。古典日本語は、実に感情表出に富む言語であった。現代日本語に継承されている係り結びは「こそ」のみであり、その使用は極めて抑制されているが、谷崎訳はそれを反映している。英語の it-分裂文も文体的効果が十分発揮される場合に限り用いられるが、Seidensticker 訳もそれに沿っている。

係り結びの衰退の第二の要因と考えられるのは、

この構文のコストの高さである。係り結び現象をもう一度確認しておきたい。

- (89) a. 吹き来る風のするは 花の香ぞ
b. 花の香ぞ 吹き来る風のする (は)
c. 吹き来る風は 花の香ぞ する

(89c)を産出するには、主題+題述構造の(89a)を基底形に設定し、これに倒置を加えて(89b)を派生させ、さらには文末の主題節(副主題)から新たな主題(主主題)を取り出し多重主題構文を構成する。今注目したいのは副主題の意味量についてである。主主題形成以前では意味量は十分あるが、形成後は「する」のような語彙の独立性が低く意味量も少ない項目が占めている。「する」は先行する主主題と題述の連鎖からほとんど予測可能な意味を表しているだけである。しかし、副主題はいかに意味が希薄であっても題述を際立たせるには不可欠である。このようなほとんど名目に随している副主題はさらに次のような例によっても確かめられる。

- (90) さてもかばかりの家に、車入らぬ門やはある。(枕草子 6)
(91) 「あはれのこことや。此の姉君やまうとの後の親。」「さなん侍る。」(源氏<帚木>)
(92) 木枯らしに吹き合はすめる笛の音を引きとどむべきことの葉ぞなき。(同)
(93) をかしきさまを見えたてまつりても何にかはなるべき、など思ひ返すなりけり。(同)
(94) すべてにぎははしきに因るべきなむなり。(同)

(90)の「ある」は存在を表し、(91)の「侍る」は「ある」の丁寧語で指定ないしは状態を、(92)の「なき」は非存在を表している。(93)の「なるべき」は推量をともなった状態変化を表示し、(94)の「なり」は単独の助動詞で断定を表している。これらの副主題の成分は一見焦点の構成素と連続的に見えるかもしれないが、実はそうではないことに注意したい。例えば、(90)は、「あるは車入らぬ門やは」の倒置形であって「車入らぬ門あるやは」の倒置形ではない。ここでの「ある」は副主題の唯一の構成素を成すものである。

同様の不合理は「こそ」でも生じている。次のような「こそ」に後続する前提節の意味量の軽さに注目しよう。

- (95) 身もいとほづかしくこそなりぬれ。(源氏<帚木>)

(96) 宮城野の露吹き結ぶ風の音に小萩が本を思ひこそやれ (源氏<桐壺>)

(95)の「なりぬれ」は状態変化の完了を表し、(96)の「やれ」は複合動詞「思ひやる」の一部の要素を表している。すべては実質的に「こそ」の焦点の背景をかりうじて確保するためである。前提と焦点を表示すれば、それぞれ「身のなりぬるはいとはづかしくこそ」、「しやるは小萩が本を思ひこそ」となる。ここで忘れてはならないのは、「こそ」は通常の語順の特定の構成素を焦点化するものであり、(95)では「身もいとはづかしくなりぬる」、(96)では「小萩が本を思ひやる」の配列に「こそ」が割り込んだ結果生じたものであり、この局所的な発話処理上の不都合さは当然の代価として我慢しなければならない性質のものであることである。

係り結び「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」の衰退の第三の積極的要因と考えられるのは、日本語における情報構造表示の一般化の達成である。主題と題述の倒置もそれに続く主主題形成も放棄することによって、情報構造は規範的な配列である主題>題述に一元化される。先に見た例で言えば、(89a)の形式である。(89a)の主題は名詞節であるが、平坦な文構造では名詞句が主題になりうる。

(89) d. 吹き来る風は 花の香のする

(89a)の主題節は同時に主語節であり、ここから構成素を主題化して取り出すことは許されないの、結局主題節は単一の主題を形成することになる。こうして、(89d)のような単純な主題と合わせて、「主題は文頭に一つのみ生成される」というきわめて高い一般性が得られる。なお、(89d)の「花の香のする」は構造的に題述であることが表示されるが、「花の香の」が焦点を成していることは「する」との意味量の差から計算されるものである。このような単純化された情報構造表示は、定着してそのまま現代日本語に継承された。

(97) a. 吹いて来る風が呈する(帯びる)のは 花の香だ

b. 吹いて来る風は 花の香がする

事態の中立的記述として主題と題述、および題述の焦点を表示し分けるだけであればこの形式で充足していると言える。

6. 結論

日本語は古くから情報構造の図式を意識する言語である。事態を言表する際に、「XはYである／

Yする」のように主題マーカの「は」によって主題と題述を截然と分ける。さらに、修辭的效果のために題述を焦点化し、際立たせる手段として係り結び構文がある。係り結びによる題述の焦点化には2種類の形式がある。一つは、「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」が関与し、主題と題述を倒置し、本来の終助詞を焦点(題述)マーカとしての係助詞とし、文末の主題節を連体形で閉じる形である。この構文は主題節から新たな主題を供給する多重主題構造を生む。題述の焦点化のもう一つは「こそ」が関与し、実質的に焦点副詞である「こそ」が通常の語順の特定の構成素を自由に焦点化し、文末は已然形をとり、逆接および順接の等位節を従える形である。個々の係助詞は発話内容や発話態度の違いによって差異化される。「ぞ」は確信に満ちた主張を提示し、非妥協的に相手の認知状態の変容を迫るものである。「なむ」は話し手の認知状態・認知行為を明かし、協調的に相手に認定してもらうように働きかけるものである。「か」は相手に向けた疑問、自分自身に向けた疑念と反語を表す。「や」は話し手の判断への相手による同意や確認を求めることを通して情報の共有化を目指すものであり、プロセスは「か」とは異なるが疑問・疑念・反語を表す。一方、「こそ」は発話内容や発話態度の制約をもたないが、「Xは何かと言えば、それはYそしてYのみだ」のような変項の他の値を排除する条項が伴っている。関連性モダリティの観点からは、「なむ」は<話し手に関連的>、「ぞ」と「か」は<聞き手に関連的>、「や」は<話し手・聞き手に関連的>、そして「こそ」は無指定であると特徴づけられる。また、係り結びの修辭的效果は漠然と「強調」と言われてきたが、関連性モダリティの観点からは<話し手による発話の「最大の関連性の保証」>に帰される。

係り結びの修辭は、奈良・平安時代を頂点にして室町時代までにほぼ滅んだ。次第に結びの活用形に破綻が生じ、スタイルや作者の好みを反映しつつも使用が徐々に後退した。「なむ」と「や」は完全に消失したが、「ぞ」と「か」は終助詞に回帰して残存した。また「こそ」は唯一係助詞として現代語に引き継がれた。<話し手に関連的>が全体および一部に関わる「なむ」と「や」が消失し、<聞き手に関連的>な「ぞ」と「か」が終助詞として残存し、さらには無指定の「こそ」が焦点マーカとして生き延びたことは合理的な変化であ

ったとみなせる。相手に強く働きかける「ぞ」と「か」には<主張>と<質問>を表示する終助詞としての役割は十分残されていた。また、「こそ」は無標の焦点マーカーとして特権的であった。係り結びの衰亡の要因は、構文の過剰性、コストの高さ、情報構造表示の一般化の達成に帰される。

係り結びの議論を締めくくるに当たって、改めて係助詞は何かを問おう。それは情報構造マーカーであると同定される。そして、この文法カテゴリーは、きわめて自然に主題マーカーと焦点(題述)マーカーに下位分類される。

謝辞

査読の方々には、異説を綿密に検討され、深い理解をお示し下さったことに深く感謝申し上げます。

注

1 阪倉(1993)は、山田(1908)に従い、「述体の句」(すなわち主格と述格を備えた理性的な判断の形式)と「喚体の句」(すなわち呼格に立つ体言を中核にした直観的な感情発表の形式)を区別し、係り結びの基礎を喚体の句に置いている。例えば、係助詞の「か」・「や」・「ぞ」は「連体形終止の喚体的な文が表すいろいろの意味の中に、すでに疑問ないしは感動の意味が含まれているがゆえに、特にその意味を強調し明確化するものとして...挿入された」(pp. 224-225)と位置づけられている。次の例がそれを示す。

i) 久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん (古今)

しかしながら、ここでの真の問題は、関連した終助詞構文や係助詞構文の他にこのような喚体的形式が存在することの意義である。喚体的形式は係助詞分化以前の意味を表すので多義的である。この多義性は文脈依存的に解消されるかもしれないし、いくつかの意味が拮抗したまま残されるかもしれないが、まさにそこが作者の狙いであろう。係助詞を暗示するにとどめ、余韻を生み出すための一種の朦朧化表現である。

2 「なむ」は物語の地の文では「けり」を伴うことが多いことが観察されている(宮坂(1952); 阪倉(1956); 此島(1966); 竹内(1986)参照)。これは語り手が「事態はこのようであったのです」といったように、新たな局面にある事態あるいはことの結

末を物語(ないしは段落)のとりわけ冒頭や末尾に定位づける常套手段であると解釈できる。伝承を語るにふさわしい形式であるとも言える(竹内(1986); 此島(1966); 阪倉(1956)参照)。

3 松下(1974)は、「や」は「一定的疑問」を表し、「か」は「不定的あるいは例示的疑問」を表すとしている。例えば、「春やとき」は『春』といふものを一つ決めて置いて其の春が早過ぎるのかどうかを疑ふのである」(p. 605)と見る。一方、「仇見たる虎か吠ゆる」は『虎』は恐ろしいものの一例として假にいふので決められて居ない」(ibid.)と特徴づけられる。要するに、「や」は、以下の本論の提案のように、まずは「早すぎるのは春だ」という話し手の主張(判断)が形成され、その真偽性についての聞き手の同意や確認あるいは話し手自身の疑念が質問の形を借りてなされるものと見ればよい。「か」は「吠えるのは敵を見た虎か」とストレートに真偽性判断を聞き手ないしは話し手自身に求めるものである。

4 尾上(2002: 66)は、係助詞には「前後両項の結合の承認の仕方をめぐって意味を与えるもの」と「上接項目になんらかの意味ないしは気持ちを加えるもの」の2種があるとし、「は」・「も」・「や」は前者に、「ぞ」・「か」は後者に分類されるとみなしている。しかし、本論では、「は」・「も」は主題マーカーであり、それ以外の係助詞は全て焦点(題述)マーカーと見なしており、この区別こそ要諦と考える。「や」と「か」について言えば、すでに注3でも述べたように、両者の相違は質問の前段に話し手の主張(判断)が介在するか否かである。焦点マーカーの係助詞には、尾上が提案するような種別は特に存在しないと思われる。

5 大野(1993: 330)によれば、室町時代末期の『天草本平家物語』に現れた文末の「や」の4割近くが「あら憎しや」、「かなしや」、「さても不思議や」のような詠嘆的感情の強調を表しているという。「や」が詠嘆に分化するのは「や」の根底にある否定疑問の自然な展開である。「さても不思議や」を例にとれば、「さても不思議だと思いが、そうではないだろうか? もちろんそうだ!」という認知プロセスをたどる。自分の情動的判断をわざわざ疑念として自問自答する様式である。答えが肯定的になっているのが詠嘆の特性である。否定的になれば反語になる。ちなみに、英語にも‘Isn’t it odd?’のような対応形がある。

6 係助詞が疑問詞を焦点にとるか否かの理由は一律ではない。まず、「か」は疑問の助詞ゆえに疑問詞があればそれを義務的に焦点に据える。「ぞ」は疑問詞に詰問のような強い主張態度が加わることで初めて焦点化の対象となる。「ぞ」は現代語での「なぜ行かないんだよ！」の「よ」と同等である。また、一見不可解にも「こそ」は疑問詞を焦点化しないが、後で詳細に議論するように、「こそ」の焦点が変項の値の指定にあるにもかかわらず疑問詞は変項の値を求めるものであり、位相が逆だからである。

7 大野(1993)は、「や」は原則的に疑問詞を承けないが、一見した例外があることに注意を向けている。

- i) ふるさとの奈良思の丘のほととぎす 言告げやりし いかに告げきや。(万葉 1506; 大野(1993: 273))

大野は、この「いかに」は実は疑問詞ではなく、間投詞と解すべきものであり、「伝言を伝えさせただけ、どうかしら、ちゃんと教えてくださいな」というほどの意味を伝えていると述べている。間投詞としての「いかに」も確かに存在するものの、i)の「いかに」をそのように見るのは不自然に思われる。むしろ、ここでの「いかに」は<質問>ではなく<疑念>を表していると思えるべきではなかろうか。(同様の見解はすでに山田(1998: 660)に見られる。)つまり、「いかに」は「どのように教えてくださいのだろうか」と問いを内面に止める<疑念>までは「や」との共起が許されていたのではなかろうか。「や」が排除したのは<質問>の「いかに」であったものと思われる。

8 大野(1993: 324-325)によれば、室町時代末期の『どちなきりしたん』を見る限り、文末の助詞の「か」はごく少数であり、「や」がほぼ全てであった。その理由として、キリスト教の教義の学習を目的にしたテキストの特殊性を反映して、「や」を格式ある表現とみなして卑属語の「か」を避けたいためであろうと推測している。確かにそのような要因も否定しがたいが、この種の「や」は問題の設定ないしは議論の方向性を確立するための自分(書き手)と相手(読み手)の双方に当てた問いかけ、つまりは疑念の喚起であろう。「何たるオラショを申すべきや。」などで見て取れるように、信徒の一人一人は等しく適切な疑念を抱くことが求められている。学習者に対して問いへの答えを

即座に出すことを期待しているわけではなく、導者が疑念を共有し、それに答えて行くのがこの種の教え方ではなかろうか。

9 「こそ」は、『枕草子』に例証されるように、随筆・日記の地の文に多用され、引き換えに「なむ」の使用が抑えられる(宮坂(1952); 此島(1966); 竹内(1986); 阪倉(1993)参照)。それは、このジャンルの作品がたてまえ上筆者による筆者のためのディスコースであるため、「なむ」のように話し手の認知状態を相手に認定してもらうことに気配りする必要がなく、事態の事実性のみに集中した焦点化の手段である「こそ」が向いているからであると考えられる。

10 半藤(2003)は、北原(1981)の枠組みに沿い、係助詞を「取立て」の視点から「絶対的な取立て」(すなわち並行する事態が想定されないもの)と「有限特有のものの中からの取立て」(すなわち対比のよう並行する事態が想定されるもの)に分類し、特に現代語の「こそ」の絶対的な取立ては「は」と近似した性質をもつとして、「主題的用法」を提案している。次のような例である。

- i) 柄にも無く開太郎さんの妻となり、あの人に愛された短い期間こそ私の人生のすべてでした。(石川達三『その愛は損か得か』; 半藤(2003: 130))

「こそ」の上部「あの人に愛された短い期間は何なのか」が問い、下部が答えになっており「は」の主題的用法と同等であるとしている。ただ、「こそ」には表現性が伴っており、「は」で置換する場合には「まさに」「まったく」などの感動的な強調表現を補う必要があると述べている。次のようにしてである。

- ii) あの人に愛された短い期間はまさに、私の人生のすべてでした。

しかしながら、すでに明らかなように、「こそ」は「は」とは対応しない。「こそ」は焦点(題述)マーカ―であって主題マーカ―の「は」とはまったく異なる。「まさに」のような主観性は次のように焦点に重ね合わさっていると見るべきである。

- iii) 私の人生のすべては、まさにあの人に愛された短い期間でした。

興味深いことに、半藤は「こそ」に主題の倒置を伴う「転位陰題文の用法」を設定している。次のような例である。

- iv) しかし、そこにこそ兼好のいたかったこと

がある。(中西進『日本人の愛の歴史』;半藤(2003: 132))

「は」で置換すれば、「こそ」の文意のまま「兼好のいたかったことはそこにある」となるとされる。つまりは、実質的に、本論の見方の通り、「こそ」の先行部分は焦点を、後続部分は主題を表すことになる。また、この用法の「こそ」にも主観性が関与するか否かは明言されていないが、「こそ」が転位陰題文と語用論的にまったく同等とはならないことは明らかであり、結局、本論のように、ここにも主観性が関与するとみなすのが妥当である。こうして、「は」による置換は次のようになる。

v) 兼好のいたかったことはまさにそこにある。

情報構造から見て iii)と v)は明らかにまったく並行的である。つまりは主題のあり方に関して「こそ」に二つの用法を設定する必要はないのであり、むしろマイナーな位置づけの転位陰題文の用法にこそ収斂させるべきであった。

参考文献

- Chomsky, Noam (1970) "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," *Studies in General and Oriental Linguistics*, ed. by Roman Jakobson and Shigeo Kawamoto, 52-91, TEC Corporation, Tokyo.
- Erteschik-Shir, Nomi (2007) *Information Structure*, Oxford University Press, Oxford.
- Gundel, Jeanette K. and Thorstein Fretheim (2004) "Topic and Focus," *The Handbook of Pragmatics*, ed. by Lawrence R. Horn and Gregory Ward, 175-196, Blackwell, Oxford.
- 半藤英明 (2003) 『係結びと係助詞 - 「こそ」構文の歴史と用法』大学教育出版, 岡山.
- 川端善明 (1994) 「係結の形式」『国語学』第176集, 1-14.
- 北原保雄 (1981) 『日本語の世界 6 日本語の文法』中央公論社, 東京.
- 河野武 (2011) 『関連性モダリティの事象: イントネーションと構文』開拓社, 東京.
- 河野武 (2013) 「『のだ』の本性は真偽性・関連性モダリティなのだ」『大妻レビュー』第46号, 43-59.
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究 - 助詞史素描』桜楓社, 東京.
- Lambrecht, Knut (1994) *Information Structure and Sentence Form*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 松下大三郎 (1974) 『改撰標準日本文法』勉誠社, 東京.
- 宮坂和江 (1952) 「係結びの表現価値 - 物語文章論より見たる」『国語と国文学』第29巻第2号, 41-51.
- 尾上圭介 (2002) 「係助詞の二種」『国語と国文学』第79巻第8号, 62-76.
- 大野晋 (1993) 『係り結びの研究』岩波書店, 東京.
- Prince, Ellen F. (1978) "A Comparison of WH-clefts and It-clefts in Discourse," *Language* 54, 883-906.
- 阪倉篤義 (1956) 「竹取物語の構成と文章」『国語国文』第25巻第11号, 15-25.
- 阪倉篤義 (1993) 『日本語表現の流れ』岩波書店, 東京.
- 竹内美智子 (1986) 『平安時代和文の研究』明治書院, 東京.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
- 上坂信男・神作光一・湯本なぎさ・鈴木美弥 (訳注) (1999) 『枕草子(上)』講談社, 東京.
- Ward, Gregory and Betty Birner (2004) "Information Structure and Non-canonical Syntax," *The Handbook of Pragmatics*, ed. by Lawrence R. Horn and Gregory Ward, 153-174, Blackwell, Oxford.
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館, 東京.
- 柳井滋他 (校注) (2017) 『源氏物語(1): 桐壺 - 末摘花』岩波書店, 東京.

Abstract

Japanese is invariably a type of language which is keenly conscious of the configurations of information structure. When verbalizing a state of affairs in an utterance, the theme (or topic) is distinguished sharply from the rheme (or comment) by theme marker *wa*. In classical Japanese, *Kakari-musubi* ('information linking') constructions come into play to focalize a constituent for a rhetorical effect. Of the two types of focalization, the one involving the set of *zo*, *namu*, *ya* and *ka* is implemented through theme-rheme inversion, changing an original sentence-final particle into a *kakari* particle linked with a closing predicate in the prenominal form. The other relates to *koso*, which freely focalizes a specific constituent in normal order, closing the sentence with a predicate in the completive form that, in turn, is followed by a (typically adversative) coordinate clause. These *kakari* particles have so far been claimed unconvincingly to designate themes in some senses comparable to *wa*. In this paper, they instead are identified as the rheme (or focus) markers which may co-occur with multiple themes comprising the postposed subsidiary themes and the newly produced main themes. Secondly, this paper clarifies the distinctive relevance modalities of these particles in terms of utterance content, formation and attitude. Thirdly, it is observed that the subsequent loss of this intricate system presumably may have stemmed from the joint factors of abundant lexicalization, costliness and attainment of generalization over information building. To conclude, the *kakari* particles are now defined neatly and naturally as the information structure markers subcategorized as either thematic or rhematic.

(受付日：2020年12月4日，受理日：2021年6月11日)

河野 武 (こうの たけし)

現職：大妻女子大学人間生活文化研究所特別研究員，名誉教授

国際基督教大学大学院教育学研究科修士課程修了。

専門は英語学，語用論，音韻論（特にイントネーション）。現在は日英語発話のモダリティ・感情表現の語用論をテーマに研究している。

主な著書：『関連性モダリティの事象－イントネーションと構文』（単著，開拓社）